

報告 2 : 尹清洙 (長崎県立大学)・百田成玉 (長崎県文化観光国際部)

孫文の「知難行易」について

青年期に洗礼を受けた孫文の実践論はコングリゲーショナリズムの信仰実践であり、彼の哲学思想をまとめたのが『孫文学説－知難行易』(1919刊)であった。

『孫文学説－知難行易』において孫文は「知」と「行」の関係について以下のように述べた。

1) 三つの段階：不知而行(知らずに行動、不知不覚者)、行而後知(行動の後に知る、後知後覚者)、知而後行(知った後に行動、先知先覚者)。

2) 知難行易：一般的に不知不覚者が大部分で、後知後覚者は少数で、先知先覚者は極わずかである。

3) 有志竟成：志を持って実践すれば必ずなり遂げられる。

また、『三民主義』(1924)において彼は次のように述べながら、皆で協力して共同で中国革命を支えるべきだと主張した。

「第一種の人(先知先覚者)は発明家であり、第二種の人(後知後覚者)は宣伝家であり、第三種の人(不知不覚者)は実行家である……。したがって、世界における進歩はすべてこの三種の人にかかっている」。

本報告では、フォイエールバッハの宗教批判を取り上げながら、知難行易の真髓について検討したい。